ＲとＮのカァディスからの手紙（第１０１号）

２００６年０４月１４日

みなさん、こんにちは。
３月末に日本ではあちこちで雪がちらついたそうですね。
カァディスでは２６日日曜日の夏時間開始を待っていたように、いよいよ夏に近い陽気になりました。　４月最初の土日には前浜は夏のような賑わいで、ビキニやトップレスがごろごろ。私達も渚の裸足散歩を始めました。

スペインは今、セマナ・サンタの真っ最中です。特に昨日木曜日のフエベス・サント Jueves Santo＝聖木曜日と今日のビエルネス・サント Viernes Santo＝聖金曜日は祝日で、この一週間の行事中一番盛り上がる日です。　カァディスのセマナ・サンタは前に紹介したマラガのと較べると大分見劣りがするもので、町の規模の大小がそのまんま出ている感じです。　マア私達異教徒にはドウでもいいことですけどね。

さて、それでは「メール版・カァディスからの手紙」を始めます。メールでは色々と制約があって、あまりミバのいいものは出来ないと思います。　でもＨＰだって特に面白い仕掛けをしてあったわけじゃないから、マッ、イイカ。
写真も画質のいいものは容量(サイズ)が大きくなるので使えません。悪しからず。
では、早速第一弾。

「コルドバのメスキータ」の巻

スペイン旅行をしたことがない方も、コルドバという地名はなんとなく聞き覚えがあるのではないかと思います。　日本では普通ヨコハマとかオオサカと同じようにアクセントのない平板な発音でコルドバと言ってますね。　私達もそうでした。
けれども、スペイン語では Córdoba と第一音節にアクセントがあります。　関東(カントウ)、関西（カンサイ)、大島（オオシマ）と同じようにコルドバと頭のコにアクセントを置くんです。

カァディスからコルドバへの交通手段は３系統が考えられます。
一番安いのは常にバス、その代わり時間が掛かるのもバス。直通で約４時間。平日は日に２便、土日１便。　一方一番早くて当然一番高いのが特急電車。２時間５０分。但し利用できる便は往き帰りとも１本だけ。

所要時間も運賃も中間どこが地方鉄道の乗り継ぎ。セビージャでの待ち時間を考えに

いれずに単純合計が３時間１５分です。　カァディス～セビージャ間は日に１２本、セビージャ～コルドバ間は１４本の運行です。　本数だけは充分に見えますが接続なんかは全然考慮されていませんからセビージャで延々と待つ羽目にもなりえます。いつも言うことですが、この辺がスペイン国内を個人旅行する場合のネックです。とにかく便利が悪い。　近郊線、地方線、中距離、遠距離、高速の運営がてんでんばらばらの感じです。私達はかなり旅慣れてきたつもりですがどうにも分かりません。

結局、初めて行く町ではあるし、出発も帰りも無理のない時間帯の特急を奮発しました。失敗だったのはＲのタルヘタ・ドラーダ(鉄道優待券)の割引が平日なら４０％なのに、土曜日だったため２５％しかなかったこと。　平日にすりゃよかったナ。

おおかたの町に、夫々その地の呼び物とも言うべき見ものがありますが、コルドバの場合はなんと言ってもこれ、メスキータです。　この写真は旧市街から橋を渡った河向うで撮ったもので、全貌を捉えるにはこのくらい離れないといけません。

この河、リオ・ガダルキビール Rio Guadalquivir は下流にアンダルシィア州の州都セビージャがあり、そこまでは４～５千トンの航洋船も並行運河を利用して遡れる大河です。　ここでも幅は結構ありますが、水深は浅く大型船の航行は不可能です。地図では並行運河はコルドバまで来ていることになっていますが、現在も使われているのかどうか？　多分自動車輸送に取って代わられているのだと思います。

この写真では河幅が狭く見えますが、これは一番水量の多い本流部分だけを見ているからで、大小いくつもある中州をひっくるめた全幅は、メスキータの前面では２００メーターはたっぷりありそうです。
この日は雨模様の日が続いた後で、河の水は特に濁っていたのと思いますが、多くの支流の清濁を併せ呑む大河の宿命として、透明に澄みきることはないのでしょう。

旅行案内書のコルドバの項に、メスキータと共に良く出てくるローマ橋という古い橋は現在補修工事中で、足場や工事用の幕などがかけられていて渡ることが出来ませんでした。　そのうち、工事が終わったらもう一度行ってみたいと思ってますが、果たして完工はイツになることやら。
この辺から河口までは約２００キロですが、その河口部には、いつかお話しした国立自然公園ドニャーナ Parque Natural de Doñana があります。

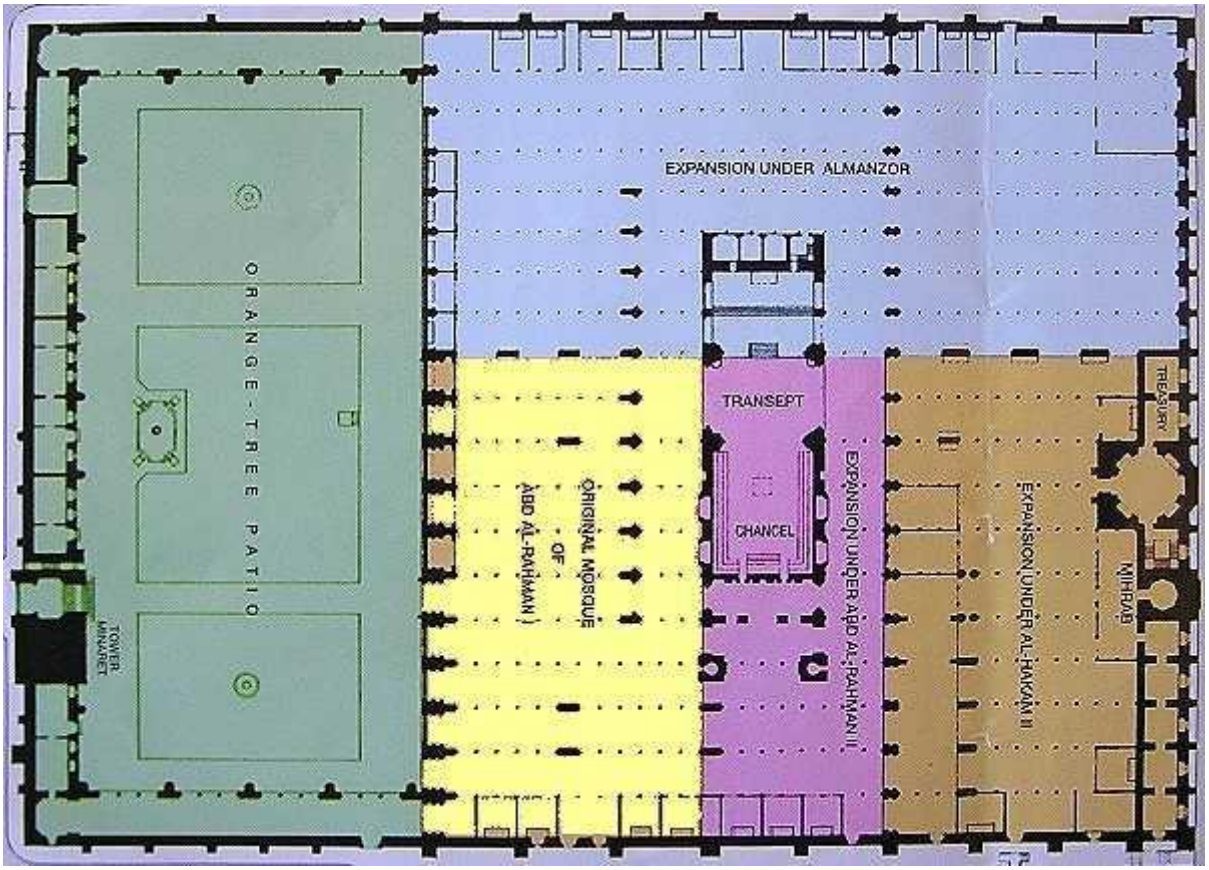
コルドバという町名にちなんでいて日本でも馴染みのある物に、コードバンがあります。　これは馬の臀部のなめし革とされていますが、元々はこの地方で盛んだったヤギのなめし革なのだそうです。手元の英和では cordovan で「馬の」となっていますが、西和では cordobán で「ヤギの」となっています。とにかく、なめし革です。
ではメスキータにはいって見ましょう。

これは、言わばメスキータの正面玄関「免罪の門」。全景写真右端の高い塔ミナレーテ(minarete＝イスラム寺院の塔)の地上階の隣にあります。　この門のアーチ型はあちこちの町の写真で記憶があると思います。　州内どこへいってもイスラムの匂いのあるところ必ずこのアーチが見られます。メスキータの中はもうアーチだらけ。

カトリックには懺悔という便利なシステムがありますね。　カトリック教徒が懺悔をすれば本当に免罪されるのかどうか知りませんが、イスラムでは懺悔さえもせず、この門をくぐっただけで免罪されるというんでしょうか？　心の中の罪の意識も消してくれるのかナ？　テロ・グループも人を殺しては門をくぐってるんじゃなかろーか？

ところで、メスキータ(mesquita)とは回教寺院という意味のスペイン語で、英語のモスク mosque と同じです。　ではココは回教寺院なのか？というと、ソレがそんなに単純なものでないからこそ、ここがココたる所以なんですね。　８世紀、最初は勿論回教寺院として当時の支配者モーロ(moro＝ムーア)によって建設され、その後何回もの拡張工事の末、最終的に２万５千人収容可能の大モスクになったのだそうです。

下の平面図で、黄・紫・茶・青の４色がほぼ正方形になってますね。コレがメスキータの屋内部分です。そして、この色変わりの順に次々と拡張していったそうです。極めつけは、回教寺院の中央に後からカトリックの大聖堂を作ってしまったこと。紫と青の部分にまたがっている黒の囲みが大聖堂の部分です。



平面図の左下の黒い四角が塔屋。そのすぐ上に隣接している開口が「免罪の門」。門をくぐって入るとソコは「オレンジの中庭」、平面図の青緑の部分です。オレンジの木が沢山植えられています。

日本語で「オレンジの」というと実は正確ではなくて、スペイン語ではパティオ・デ・ロス・ナランホス Patio de los Naranjos、ナランハ naranja はオレンジの実、ナランホ naranjo はオレンジの木ですから、「オレンジの木の中庭」と言うべきでしょう。

回教の信者はこの中庭にある池で身を清めてメスキータに入ったといいます。言うなれば日本の神社の御手洗ですね。

ここのと同名の門と中庭がセビージャのカテードラルにもあります。ということはセビージャにもメスキータがあったのか？　その通り、セビージャのカテードラルはメスキータを取り壊して建設されたんですね。　そして「ヒラルダの塔」という塔屋部分だけにイスラム建築の名残をとどめているのです。

なお、最初に触れた塔屋ミナレーテ minarete もスペイン語、多くの旅行案内書では英語で(minaret)といっています。　ここコルドバの塔もやはりカトリック教徒によって手を加えられ、大聖堂の鐘楼となっています。

セビージャだけでなく、アンダルシィアの殆どの町のカテードラルは、モスクを取り壊した上に建造してあるらしい。　しかし、ここ「コルドバのメスキータ」が世界遺産に指定されている理由は、回教寺院の壮大さもさることながら、回教寺院を取り壊してではなく大部分を残して、その中にカトリックのカテードラルを造ってしまったところがユニークだから、なんだと思いますが、どうでしょう。

＊

さて、免罪の門から入り「オレンジの木のパティオ」をまっすぐ横切るとメスキータの屋内に入れます。　ここから先は有料です。朝８時半から１０時まではミサの時間で無料で入れるらしいですが、私達がいったのは午後で有料。　しかもこの手の場所の入場料としては破格の高値、一人８ユーロ。晩酌ビーノ３本分。

ところが嬉しいことに例のタルヘタ・６５を持っているＲは無料優待です。今まで州内各都市間のバス料金にばかり気を取られていましたが、どうやら州政府が一枚かむ施設は全てこの調子らしいと知りました。ご利益アラカタな寺院というべきか？

メスキータの内部はこんな調子。とにかくもうアーチ・アーチの連続。同じアーチでも上のようにシンプルなもの、下のように精緻なものなど色々。九谷か伊万里か？

上がメスキータの中央部分を占領したカテードラル。下の写真はその隣接区画の壁。

アラベスクの中の十字架。和洋折衷なんていう生易しいもんじゃないですね。

アーチ×アーチ×アーチ。それにしても、イスラムもカトリックも、金に糸目をつけず、コレでもか、とばかり宗教のチカラを誇示しているようで、些か辟易です。

これらに較べると写真集「古寺巡礼」などに見る日本の古い木造の仏堂のなんと素朴且つ味わい深いことか。　日光東照宮なんかは別ですけどね。これは明らかに支配者の力の誇示に他ならず、メスキータやカテードラルと同列。　言っちゃーナンですがけったクソ悪いだけ。　宗教と支配者がツルムとろくなことになりませんネー。

この日は３月末で日本の春休みの最中でしたから観光ツアーの日本人グループに何組も出くわしました。　ほの暗いメスキータの中ではちょっと油断すると同行者とはぐれてしまいそうなので、みんなしっかりかたまって歩いていました。　散らばらないでくだサーイ、なんてツアコンに言われてたのかも・・・。

＊

有名観光地へ行くとＪのグループだけでなくＫやＣのツアー・グループも良く見かけます。最近特に目立つのはＣのグループ。　Ｊ・Ｋ・Ｃの違いは個人個人では判別がつきにくいこともありますが、グループとなると一目瞭然。いずれも目立ちます。

とにかくＪグループはお行儀がいい。　大きな声で私語することも少ない見たいですね。　狭い歩道を通るときはちゃんと２列縦隊になったりして、保母さんに引率される幼稚園児みたいで微笑ましい。　但し全員がデジカメでパチパチがＪのＪたるところ。　これじゃあ、やっぱりスリ・追いはぎ・カッパライのいいカモだー。

＊＊＊

「タルヘタ始末記」の巻

私達の第三次居住許可の更新に手間取っていることは、前にお話ししましたね。
１１月半ばに申請書を提出して、３ヶ月経ったら指紋押捺だというから、２月半ばに行ったらダメ。３月初めに行ってもマダだめ。３月半ばに当てにもしないで散歩がてら行ったけどやっぱり駄目。

そして、３月どん詰まり、期待感全くナシでまた行ったら、思いもかけず居住許可が出ていました。日付を見ると３月１３日となっていましたから、半ばに行ったその直後に出来てきたんでしょう。

受付のオバさんもすっかり私達の顔を覚えていて、出来てるわよ、とニッコリ。
ポル・フィン ¡Por fin!＝とうとうですね、と少々皮肉を込めて言ったつもりでしたが、「そう、とうとうヨ」とストレートに喜んでくれました。
こういうところが実に憎めないイイところ。　勿論、事務の遅れはオバさんのせいじゃありません。

指紋押捺を済ませると、タルヘタ（居住許可証）の引換券をくれて、１ヶ月半したらとりにいらっしゃい。　さて、この１ヶ月半がまたもやクセモノです。
引換券の裏には、この書類の有効期限は発行の日から４５日、と明記してあるのに、前回は丸２ヶ月もかかったんですよ。　今回もまたどうせそんなことでしょう。

居住許可の書類を良く見ると、有効期限は第二次許可と同じ２年。　これまでに見聞きした資料では第三次は３年とも５年とも書いたものがありました。　所詮ヒトのハナシは無責任な他人の話、何事も自分で体験してみないとワカランと改めて肝に銘じ

ました。　一つには２年前の政権交代以来、外国人受け入れ制度に色々と変化があったのかも知れません。　まあ、私達には２年で充分。

こういう事務手続きの非能率も不明確も、スペインがややもするとＥＵ諸国の中で軽く見られる原因かも知れない。　申請必要書類が窓口の係員ごとに違う、ナンテことがあってはいけませんね。　そして何よりいけないのは、そういうことが諸外国の明瞭且つ能率的な事務処理のレベルから大きく遅れているという自覚に乏しいのではないかということ。　自国の旧植民地である中南米諸国を見て優越感に浸っているようではイカンでしょうが・・・。
ピレネーの向うはやっぱりアフリカだ！なんていわれないようにしなきゃーネ。

＊＊＊

この「手紙」は、ＭＳ明朝１２ポイント、一行を半角７６文字折り返し、で書いています。　添付写真と文をバランスよく見るには「表示」→「文字のサイズ」で「中」を選択して頂くといいと思います。

また、プリントでご覧になる方は、用紙Ａ４の余白設定を上２０、下１５、左２５、右１５にすると各頁無駄なくピッタリ収まるはずです。お試しください。

＊＊＊